

ふれあい動物園

福田 努



出会い

福田牧場は、二十年前に「子どもたちに本物の牛を見せたいので、連れて来てくれますか」と、ある近所の保育園の先生から依頼されて始まった、移動動物園です。

七百キログラムの巨体のホルスタインを、その保育園のブランコにつないだときにあがった歓声は、今でも耳に残っていて忘れられません。子どもたちの「わあー」「きゃー」という、まるで恐竜がやってきたかのような驚きの声でした。

今は安全面や衛生面などで、残念ながら、成牛を連れて行くこともなくなりました。

移動動物園と一言で言いますと、ゾウ・キリン・ライオンなどのイメージがあるのででしょうか。子どもたちからも「ゾウさん来た?」「ライオンは?」などとしばしば質問を受けます。

そういう声を準備中に耳にすると、子どもに、「どんな動物がトラックから出てくるか、楽しみに見ていて」と言ってみます。

そのときには、子どもたちはゾウもライオンも忘れて、ヤギやヒツジが出てくるたびに歓声をあげて

います。

現在の動物の種類は、ポニー・ヤギ・ヒツジ・ブタ・アヒル・ウサギ・モルモット・ニワトリ・ヒヨコ・カメ、そして人間のスタッフと、乳を搾る乳牛が十二頭と子牛が三頭います。動物園に出かける前に搾乳をして、また、夕方に搾乳をして、ようやく一日の仕事が終わるのです。

何度か、もつとほかの動物を入れてみようと思ったこともありました。しかし、酪農を営んできた私にとって、移動動物園もその延長であり、生き方そのものでありたいという気持ちから、最初は、「出前牧場」という名前で、家畜中心の動物園を始めたのです。

今も昔も……

私が子どもころは、たいていの農家の納屋には、牛やヤギがいました。

学校帰りに友達とのぞいては、「ヤギの子どもが生まれたよ……」などと話をしたもので、身近に動物がいる暮らしが当たり前でした。

人間の生活が便利になるにつれ、動物は本の中でしか、なかなか見られなくなってきました。近ごろはペットが飼えるマンションが増えてきましたが、ヤギ、ヒツジを飼うことは不可能で、動物園でも、ブタを見ることができません。

めざましい経済成長は誇らしいことですが、その一方で、ほのぼのとした生活環境や自然が減ってしまっただけは事実です。

しかし、二十年ずつと変わらないものもあります。それは、子どもの感性と、きらりとしたその瞳です。

あいさつで始まり、動物の扱い方の話を聞いてからの子どもたちの行動は、それぞれに個性がありますが、何度立ち会っても、子どもたちの行動を見飽

きることもなく、こちらも楽しんでいます。

かかわり

ポニーには乗ることができます。しかし、子どもの目線では、大きい動物に見えるのでしょうか。真つ先に飛んでくる子もいますが、じつと、遠くから見ている子も少なくありません。それでも、ポニーに乗って楽しそうな友達を見て、自分もやってみようと勇気を出して乗りにきます。一度乗ってしまようと、ポニーのぬくもりや心地よい振動が伝わるのでしよう、また列に並んで乗る子どもがいます。

乗馬という行為は、障害をもつ方々のリハビリにも用いられるほどですので、馬と人間の関係は深いものがあるのかもしれない。

ヤギ、ヒツジは、とても人なつっこく、自分から子どもの方へ寄って行きます。時には、持っている餌の野菜をいきなりパクリとされて、半べそをか

子どももいます。親の世代でも、あまり

接したことの少ない方が多い

ようで、五月

の毛刈りを終

えたばかりの

ヒツジを見て

て、大人でも

ヤギと間違え

ることもあり

ます。特に、ヤギ、ヒツジは、餌をよく食べてくれるので、餌を与えることは子どもには楽しみの一つです。

春先の子ヤギや子ヒツジを披露すると、子どもたちには愛おしさいっぱい笑顔が広がります。しつぽ



▲わたしは、お母さんヤギ



をふりふり、親のおっぱいを口いっぱい含む子ヤギを見た子どもたちは、

「いっぱい飲みなさい」

「おいしい？」

と、お兄さん、お姉さん気取りです。こうして、春のシーズンは特ににぎやかです。

大きいブタも見せたいのですが、運ぶのが大変なので、小さい子ブタを連れて行くようにしています。ブタのしっぽを見たことがありますか。大人で

も意外と見たことがない方が多いようです。鼻に特徴があるので、どうしても、ブタの顔ばかり見てしまいがちです。

頭のよいブタは、人間に餌の催促などシグナルを送ります。『ブーブー』という鳴き声で訴えたり、また、つぶらな瞳でじいっと見つめてくれたりします。

しっぽだつてちぎれるくらい一所懸命振ってくれるのです。大きなおしりをしているのでなかなか目立たないのですが、かわいいしぐさです。

ウサギやモルモットは大きなサークルで囲み、子どもたちが中に入っているやベンチに座って抱いたり、触ったりできます。自分たちより小さく弱い物に対する扱いはいいねいで、口調は母親のようです。

「おりこうさんね。だっこしてあげましょう」と話しかける姿が見受けられます。

しかし、窮屈に思ったウサギが、子どもの手から

逃げていくこともあります。思いのままにならない、その体験で、子どもは動物にも意思があると知るので。あきらめる子もいれば、くやしう思っている子もいます。そういうときには、もう一度スタッフが、抱き方や接し方を教えます。

子どもたちの多くが、ウサギは白い毛色で赤い目のイメージをもっているせいか、白いウサギを抱きたがる子が多いのですが、茶色や、黒、バンダ柄の「色ウサギ」も楽しんでもらいます。

お礼として、子どもたちから絵を見せてもらった、手紙を受け取ったりしますが、その多くはやはりウサギです。童話などにも出てくるからでしょうか。今も昔も変わらずの人気者です。

鳥類としては、アヒル・チャボ（ニワトリを小型化したもの）・ヒヨコがいます。鳥類が特に好きな子は、徹底的に興味をもちます。アヒルは四キログラムくらいの体重がありますが、一所懸命抱き上げ

ようと、後ろからついてまわります。チャボも同じことがいえます。

ヒヨコも子どもたちに人気があります。小さくて、綿のように温かいヒヨコは、ケースの中に一羽ずつ入れて見せますが、子どもに触らせたり、抱き上げたりさせることもします。子どもの手のぬくもりというか体温が伝わると、ヒヨコはおとなしくなります。また、子どももヒヨコの温かさを感じて、優しく見守ろうとします。

「ヒヨコさんが今寝てるから、静かにして」と、子ども同士でささやき合う声さえ聞こえます。

暖かい五月から十一月には、クサガメを連れていきます。大きなタライの中に四匹入れて、自由に触らせるのですが、あるとき時期がずれて持つて行かないことがあります。そのときは、クサガメを楽しみにしていた子がとても残念がっていました。

自分たちが思っている以上に、子どもたちが楽し

みにしていただけることがうれしく、また、そういう期待に応えるような動物園にしたいと思います。

移動動物園は、基本は二時間で、延長も可能ですが、二時間あつても子どもたちは物足りなそうにします。また、それより長いと子どもたちは飽きて、遊具で遊び始める光景がしばしば見られます。「楽しかったね。また動物さんと遊びたいな」と思えるくらいの時間がよいと思います。

二時間のふれあいは、動物と子どもとのコミュニケーションでもあるのです。日常生活では見ることもしふれることもできない動物との対面が始まり、命あるものの体温を感じ、呼吸を知り、いとおしさ、かわいさ、そして時には怖さを体験させることの大切さを、毎日感じています。

月日が流れ

昨年、ガス工事を頼んだときのことです。その工

事に来たスタッフの中に、仕事がいねいであいさもさわやかな青年がいました。その青年は、わが家の動物を見て驚きを隠せなかったこと、そして幼稚園時代に園に動物が来たことを話してくれました。

そうなんです。その青年は、以前私たちが伺った園の園児だったのです。月日は流れて、社会に貢献できる大人になっていたのです。うれしいことです。少しでも思い出になっていたのですから。

この仕事を始めて多くの人とかわつてきました。動物のことを教えることもありますが、子どもたちからも生きるパワーを充分もらい、また、先生方から教育・しつけを学ばせていただいています。それらは財産であり宝でもあります。

動物相手の仕事ですので、より多く件数はこなせませんが、これからも今ままでおりの形で、人にも動物にも優しくやっていきたいと思っています。

(神奈川県川崎市・福田牧場)